北から南からやって来た！

雪上に熱戦展開

西仙北町で ミニ独立国オリンピック

全国のミニ独立国の国民よ、雪国秋田でオリンピックをやろうではないか！。―西仙北町刈和野の秋田カエル村が全国のミニ独立国に送った〝不敵〟ともいえる挑戦状？。それにこたえて、北は北海道、南は鹿児島から十八カ国百二十人の各種国民が十一日、カエル村に集まった。迎えるはカエル村国民。そして一日亡命を求めて同国に入った応援の外人部隊合わせて三十人の「雪上」でのデッドヒートの展開とあいなった。

マキを手にかんじきをはいて山を走るマタギ競走。ナゼか三度笠姿の選手もいた。

チビッ子たちの宝探しも。雪原の中を駆け回った。

戦場―。（いや、どうも殺気だっていかん、平和なオリンピックだ。会場といいなおそう）。そうだ、会場は西仙北町の刈和野中、刈和野小、西仙北高の〝雪のグラウンド〟だ。

「我こそは北の王者」と北海道からはロマンカントリー大江国。南からは「酒の強さなら秋田に負けない」と九州は鹿児島「みやんじょチクリン村」のかぐや姫と焼酎自慢の国民。島根県からは「いずもオロチ王国」。秋田県勢もきた。男鹿なまはげユーモア村からマスコットのベゴッ子を引き連れての〝七人〟のサムライ。だが、これには参った。マスコットの牛はモウーモウーと雪の会場を行進しながらベトベトとお尻からのお見舞い、洗礼―。とにかく多彩な顔ぶれといえよう。

多彩といえば、オリンピック競技も限りなく多彩、残酷かつユーモア。「競技始め！」の号令と共に展開された「雪上マラソン」は、一キロをはだし、またはタビで走れっ、だ。おまけに途中、五十㍍だけは四つンバイという試練も。「嘆かわしい。国王たるワシが、なぜ犬のマネまでせねば……」と心で〝慟哭（どうこく）〟、顔で破顔一笑、ゴール目指す偉い人？もいた。途中、悲鳴をあげリタイヤする人もいた。気持ちを察してか、天も同情の涙、雨をパラパラ。参加者はズブ濡れ、〝無情〟の雨だったが…。

人間ボブスレーという珍競技もあった。ソリに代わって、人間そのものが坂道を滑る。ルールはいたって簡単。「ケガをしてはならない」だけなんだから。北国っ子も、南国っ子もがんばった。なりふり構わず、ビニールシートを武器に人間スライデング！。さらには暖気でグシャグシャの雪のコース、途中、落とし穴数カ所、ジャンプ台あり、アンカーは後ろ向きで走るのを条件にした「障害物競走」もあった。四人一組の駅伝だ。上国代表のだれか、見事に落とし穴にはまるかが競技のミソ、いや見どころ。一人が落ち、それを避けようとそれるとまた一人、はまる。会場を埋めた大観衆？から笑いと拍手と声援。そして熱気。

「雪って、冷たいですねェー。イヤラシィですネェー」。九州や関東から北国のロマン・雪に憧れて勇んで参加した国民はボヤいた。「だれがこんなことをうえたのオー」、かん高い声で叫んだ選手もいた。「だれが考えたんでしょうネー」。嘆きの声の大合唱にアイデアと企画担当佐々木正光カエル村村長はニヤリと笑った。

オリンピックはきょう十二日が佳境に。上半身裸、足はビニール袋でまとって雪の土俵で相撲をとる「寒中相撲」、水着一枚で雪中に立つ「ガマン大会」、五十㍍のコースをドラム缶を押しながら走る「人間ブルドーザー」と多彩に。選手たち、雪と寒さを物ともせず、燃え上がるか？。競技は午前十時から、刈小グラウンドで。総仕上げは夜の刈和野大綱引きへの参加だ。

'87ミニ独立国冬季オリンピック大会

二/6 週刊アサヒ

ユニークな競技 13種目

2月11、12日　西仙北町刈和野

十二日は仙北郡西仙北町の刈和野大綱引き。これにあわせて十一、十二の両日、同地で「第一回日本ミニ独立国冬季オリンピックみちのく大会」が開かれる。主催は秋田カエル村を中心にした同オリンピック実行委員会で、西仙北町と同町観光協会が後援、地元の活性化を狙う。

競技はおなじみの「スノーピラミッド大会」をはじめ、人がソリの代わりに滑る「人間ボブスレー」、ゴム手袋をはめ肥料袋をはいて行う「寒中相撲大会」のほか「雪玉射撃大会」「ガマン大会」「人間ジャンプ競争」「ミニスキー競争」「自作ソリ競争」などユニークなものばかり十三種目。

参加資格はミニ独立国〝国民〟および〝亡命〟希望者ほか健康な人ならだれでもOK。

宿泊その他についての問い合わせ、申し込みはカエル村内事務局（〒0187・75・2626）へ。

No.38